

オピニオン

うらみなり

投書欄

ヴァン・リード評について

島岡 宏

今日人類が直面する難問の一つに、大量の難民や集団移住労働者をめぐる深刻な社会問題がある。人類に課せられた課題にわれわれ日本人も無関心でいることを許されない。問題解決の道を探る時、日本人移民の苦難の歴史は恰好の指針となる。移民ではなくむしろ棄民の色濃い歩みは、大量人口移動のもつ本来の意味をわれわれに問いかける。なかでも海外集団移民の草分けに目を向け、彼等の足跡を歴史の表舞台に登場させることはその第一歩となる。

ハワイ官約移民1000年を翌年にひかえ、知られることの少ないわが国の海外集団移民に歴史の一ページを裂く西野照太郎先生のご高論「慶応四年のゴム労役出稼人」(第23号誌上)、「ヴァン・リードとハワイの関係」(第24号誌上)は、その意味できわめて意義深いものである。「広く国民に知らせることは太平洋学会の使命ではないか」とのご指摘は異論の挟む余地がない。

ただ移民をあっせんしたヴァン・リード評に対して少し疑義を差し挟んでおきたい。西野先生は、ハヴァンリードによる日本人年期契約労働者の募集は、日本版「ブラックバードイング」だったのであろうか。〔第23号誌上〕と記し、日本側のヴァン・リードの代表的なものとして、ヴァン・リードに好意的でない小野秀雄氏の「幕末明治新聞全集」第4巻の一文を引用されている。(第24号誌上)

確かに西野先生のご指摘のようにヴァン・リードに対する評価は悪評が目につく。不良外人の第一号と酷評する書物さえみられる(高梨健吉「開国期の英語」)。

特に高橋是清渡米あっせん事件はヴァン・リードの悪名を永久に残すものになった。ヴァン・リードは是清の渡米をあっせんし、しばらくサンフランシスコの両親の家に家僕として置いたのち、あたかも奴隷のごとく、是清をオークランドの富豪ブラウン家の家僕に転売して世人のひんしゆくを買った。(高橋是清「高橋是清自伝」)

また元年者移民あっせんの行為も当時の世論から厳しい目でみられ、「黒奴売買の所業にひとしき事」として非難をうけた(中外新聞「第20号」)。明治政府からはハワイ駐日総

領事としての地位を認められず、一時は総領事の役職も辞任、日布修好通商条約締結後に外交交渉にたずさわらないという条件で、復帰を認められたほどであった。

しかし私は日頃からヴァン・リードを「移民の生みの親」(官約移民実現の立役者ロバート・ウォーカー・アーウィンを「移民の父」と呼び、ヴァン・リードの移民あっせんを高く評価している)。

ヴァン・リードの移民あっせんが崇高な理念に基づく行為ではなく、商人的発想による手数料稼ぎにあったことはいうまでもない。しかしヴァン・リードの目的がいざれにあつたにせよ、また彼の行為が功罪相半ばするものであるにせよ、日本人の海外発展の礎をつくった点において、まぎれもなくヴァン・リードは明治日本をつくりあげた貢献者の一人にあげることができる。

もし一人のヴァン・リードもいなかったなら、また日本最初のハワイ集団移民の実現にその命をかけた一人の移民周旋人の行為がなかったならば、元年者ハワイ渡航の歴史的一ページは開かれていなかったかも知れない。

あるいはその後明治18年(1885年)から続く官約移民の実現も、また今日日系市民が活躍するハワイの姿もその形をかえていたかも知れないのである。まさにヴァン・リードの残した功績は大きいといわねばならない。今日改めて正しい評価をヴァン・リードに与えるべきである。

グアム島移民とヴァン・リードの関係については、松永秀夫氏の「これは「表面の立役者でなかった」とみる方が正しいようである。しかし、この移民にヴァンリードの役割が一枚加わっていたことは、記憶に入れておいたほうがよい」(「ハワイ移民「元年者」の横浜出帆」)のご指摘を紹介しておく。

ヴァン・リードは多方面で多才な才能を発揮した。①ハワイ駐日総領事やアメリカ領事館書記生・館員といった公人の顔、②ハーバード商会と提携、政商の一人として暗躍、貿易商人、諸藩への武器の売り込み、汽船売買の仲介人、外国米売捌所の開設、銀相場師、海員宿の経営などの商人の顔、③新聞「横浜新報もしほ草」の創刊、地図「万国蒸気船航海路程図」・「蒸気船航海路程図」・「新改正万国表」の発刊、日英会話書「商用会話」・「和英商話」の発刊といった文化人の顔をもって幕末、明治の動乱の時代を生き抜いた。

にもかかわらずヴァン・リード評が芳しくないのは、ヴァン・リード自身にも多くの問題があるものの、①ヴァン・リードが日本の言語、風俗、習慣に通じた風変わりな外人で、度の過ぎた郷に入りては郷に従え式の生活に好感をもたれていなかったこと。②商人ヴァン・リードをことさら強調するあまり、何事もただ金儲けのためであったと曲解されていること。③ヴァン・リードの呼名の問題、などがその背景にあげられる。

ことに呼名は一定せず、Van Reed をヴ

アン・リード、ヴァンリード(英語式発音による表記)、ウエンリート、ウエンリード、ヴエンリード、ウエンルイド、ウインリウ(オランダ系アメリカ人を念頭においたと思われる表記)、ベンリウ、響理度(「横浜新報もしほ草」の署名)と多種多様に表記された。ヴァンを名、リードを姓とする間違った著作も目につく。同時代の『横浜開港見聞誌』もウエン^字「リイ^名ト、ウエン^名」^名「リイ^名トとしている個所がある。

こうした名前の表記の多様さが誤解を生み、正しい業績評価や人物評価につながらない一因になった。

ヴァン・リードの日本通は、彼に政商への道を開き、文化活動の源となり、移民のあっせんに心血を注がせ、ハワイ駐日総領事にまで至らしめる原動力になったことを無視してはならない。

とりわけヴァン・リードの文化面での活動は注目に値する。アメリカ人による本邦第一号の編集・出版とされる日英会話書『商用会話』(文久元年、1861年11月に出版、翌文久2年に『和英商話』と改題)は、当時のベストセラーになったという(松永秀夫「元年者を実現したヴァンリードの生涯」)。内容的にも優れた会話書で、日本英学史に非常に価値の高い著作である(重久篤太郎『日本近世英学史』)。

これだけのものを来日わずか2年半のうちにとまとめたヴァン・リードの才覚や努力は高

く評価されるべきで、当代随一の文化人の一人であったといっても過言ではない。ヴァン・リードは決して不良外人呼ばわりされるような見識の劣る人物ではなく、「移民の生みの親」の名に恥じない人物であった。

なお、「横浜新報もしほ草」の創刊に関しては、「ヴァン・リード発行という形式にして、『もしほ草』発行を吟香が企画したと見るのが妥当である。居留地外人の治外法権という特権を活用する手段は、彦に協力して『新開誌』を発行した経験を持つ吟香の発想と見るのが真相に近い。」(近盛晴嘉「ジョセフ彦記念会誌」第13号)とする指摘もある。

バックナンバーについて

太平洋学会誌のバックナンバーは創刊号から全部揃っております。各号とも会員に対しては一冊一、二五〇円(送料無料)で、会員以外の方には送料共一冊一、五〇〇円でお分けしておりますので、ご希望の方は、郵便振替口座東京三二六五七五一または現金書留にてお申込みください。

△太平洋学会事務局▽